

No.	提 案 名	提 案 団 体 名		
		代表者氏名	所 属	
9	宇都宮まちなか魅力向上作戦 一歩いて愉快なまちづくりー	宇都宮共和大学 山島ゼミ2年		
		石岡 愛里	宇都宮共和大学 シティライフ学部	
			指導教員 氏 名	山島 哲夫

【1. 提案の要旨】

オリオン通りやユニオン通りを含む宇都宮の中心市街地は、栃木県庁所在地として、人口50万都市の顔として常に賑わっていることを期待されている場所である。しかし、近年オリオン通りやユニオン通りは朝夕の通勤・通学のための通り道としての機能が強まり、商店街としての魅力と活気は感じられない。

しかし一方で、宇都宮の中心市街地は、宮祭りや餃子祭りなどイベントが行われると、たくさんの人々が訪れ、活気と熱気に包まれる。つまり、宇都宮のまちも、人を惹きつける魅力的なイベントが行われたり、まちに訪れたい場所があったりすれば、活気あふれるまちにすることが可能なのである。

ところで、近年『もっとも行きたいまち』『もっとも住みたいまち』の上位に必ずと言って良いほど挙げられるまちに、東京の吉祥寺がある。このまち是人に『歩いていて楽しい』『もう一度行きたい』と思わせるような工夫がいたるところになされており、街なかの行楽地・商店街として優れた空間を作り出している。こうした工夫には宇都宮も見習うべきものがあり、少しでも取り入れることができれば、宇都宮を常に人で賑わうまちにすることも可能と考えられる。

そこで本提案では、人気の高いまちの代表とも言える吉祥寺をとりあげ、その工夫、特徴を検証する。そしてそれを宇都宮に適用できるかを調べ、どのような工夫を取り入れていくべきか検討する。

【2. 提案の目標】

本提案は、人通りの少なさ、活気のなさという点で50万都市の中心市街地に相応しくない状況になっているオリオン通り・ユニオン通り等の中心商店街周辺の改善案を提案するものである。そのために吉祥寺という『歩いて楽しいまち』の特徴・工夫を分析し、宇都宮に適用できそうなものを取りあげ、宇都宮を『歩いて愉快的まち・うつのみや』とするための方策を提案することを目標とする。

【3. 『歩いて楽しいまち』吉祥寺の分析】

今回提案する『歩いて愉快的まち・うつのみや』のイメージのモデルとする吉祥寺について検証する。

3-1. 魅力的・個性的なイメージを持った多数の路地

吉祥寺にはメインの商店街から多数の細い路地が伸びている。その沢山の路地は路地ごとにイメージ——飲食店のみの路地、雑貨屋の類が並ぶ路地——があり、同じジャンルの店がまとまっていることによる買い物のしやすさ、次の角を曲がった先の路地にはなにがあるのかという発見の楽しみ（曲がり角は、そこで景観が変わる重要な場所である）を持たせることに成功している。

3-2. 井の頭公園の存在

吉祥寺駅のすぐ傍には、武蔵野市と三鷹市にまたがる巨大な井の頭恩賜公園がある。この公園は井の頭池を中心として水場と森林が広がり、心地よい空間を形成している。ベンチなどの腰を掛けられる場所が沢山あり、のんびりと緑を眺めながら足を休めることが

(図-1) 吉祥寺駅周辺の街路（路地）

ができ、休日になれば必ずといって良いほど出てくる大道芸やフリーマーケットなどを楽しむことも出来る。井の頭公園を目的に多くの行楽客がこの地を訪れているのはもちろん、吉祥寺の商店街での散策に疲れたとき、一息入れるのにもうってつけの場所なのだ。また逆に、公園でのんびりした後、街なかで買い物をしたり、飲食するという相互補完の関係にある。喧騒から一時離れることができる安らぎの空間があるからこそ、吉祥寺でのまち歩きも一層楽しくなるのである。

3-3. 『ちょっと一息』を入れることが出来る場所の存在

吉祥寺にはたくさんの種類の店が存在するが、中でも多いのが飲食店である。中にはもちろん、しっかりした食事を摂れるレストランもあるが、ファーストフード店を始め、落ちついた雰囲気の喫茶店から気楽な喫茶店・洋菓子店、さらには、焼き鳥屋、タイ焼き屋、メンチ・コロッケなどの店もあり、『ちょっと疲れた』『ちょっと小腹が空いた』ときに利用できる店が多い。しかもそれは種類が豊富なだけでなく、吉祥寺のま

ちのいたるところに散らばっていて、どこを歩いていても、ちょっと立ち寄ることができる。吉祥寺の買い物客は疲れたらすぐにどこかの店で休むことが出来るので、長く吉祥寺に留まり、吉祥寺駅から離れたまちの奥まで歩き続けることができるのである。

また、ベンチなども多いため、店で買ったものや自動販売機で買ったものを腰掛けて飲食することも出来る。

3-4. 客を呼び込む努力

吉祥寺を歩いていれば嫌でも耳にするのが、大きな『いらっしゃいませ』『どうぞご覧になってください』などの呼び声である。人ごみの中、店の外まで出た店員が声を張り上げて呼び込みやオススメ品の解説などをすれば、人の目は当然その店の方向に向くし、買い物もしやすい。また、店の軒下などにはワゴンが設置されていることが多く、客が商品を手に取る機会が多くなり、気軽に買い物を楽しむことが出来る。

3-5. 吉祥寺の特徴のまとめ

吉祥寺のまちとしての特徴をまとめると

- (1) まちに広がりがある（路地の存在、線としてではなく面としてまちが広がっている）
- (2) ちょっと休める場所が多い（喫茶店、飲食店、ベンチ等）
- (3) ゆっくりと散策や自然を楽しめる場所がある（井の頭公園）
- (4) 各店舗がおもてなしの心を持ってお客に接している

【4. 宇都宮中心市街地の現状と課題】

4-1. 広がりや無い商店街と少ない路地

オリオン通り・ユニオン通りから伸びている路地が少ないうえ、その路地に個性的な店などはあまり存在していないため、人々が路地に入っていくことが少ない。宇都宮の中心商店街であるオリオン通り・ユニオン通りは、途中で曲がり角も少なく一本道というイメージであり、単調で面白みが足りない。まちを歩くのは一方通行になり、歩いても楽しくないまちになってしまっている。一本道では先が見えてしまい、まちに奥行きが感じられない。路地や曲がり角が多いと、そこを曲がることにより新たな景色を見ることができる。まちに広がりをもたらすためにも、路地空間の充実を図る必要がある。

4-2. 休む場所の少なさ

宇都宮中心市街地には、ベンチや腰掛けられる段差（階段や垣根など）といった休憩できるスペースが殆ど無い。そのために歩きつかれたときに休むことができなかつたり、まちの中で飲食がしにくかつたりする。その結果、人々が宇都宮の街なかに滞在する時

間が短くなっている。中心市街地の商店街が宇都宮駅方面と東武宇都宮方面とを通り抜けるためのただの道と化してしまっているのである。まちなかに活気を持たせるために、いかに訪れた人の滞在時間を延ばすかということも考える必要があり、そのために、まちなかに休める場所をつくるのが大切である。



(図-2) 宇都宮中心部の街路と路地

4-3. 買い物が楽しくできない

オリオン通りには様々な種類の店があるが、多くの店において、愉快地に買い物をしているというイメージはあまりないように感じられる。私たちがそう考える理由は、お店の店員がお客に対し、必ずしも、にこやかに対応していると思われていないことも原因となっていると考えられる。客＝店に入って物を買っていく人、という風に捉えているように見える場合もある。

吉祥寺のような『いらっしゃいませ』という明るい呼び込みは少なく、店に入ると椅子に座っている店員が客をじっと見ている店もある。また、一方で、店員がすぐに客のそばに来て、客が自由に見て回れない場合も見受けられる。客としてはあまり居心地がいいとはいえないのである。宇都宮は『おもてなし日本一のまち』を目指しているのに、このことの意味がよく理解されていない場合もあるようだ。

気持ちよく買い物が出来る店が少なければ、その店を訪れるお客の数は減り、当然そ

れが商店街を訪れる客自体の減少にもつながってしまう。「おもてなし日本一のまち」に相応しい、宇都宮らしい接客の意識を作り上げていくことも大切である。

4-4 走り抜ける自転車

オリオン通り・ユニオン通りは宇都宮駅方面から来る人々のためのただの道になってしまっていると述べたが、それが一番顕著になる時間帯が通勤・通学時間、特に学生が通学する朝と夕方である。

この時間帯には足早に歩いて商店街を通り抜ける人も多いが、それ以上に目立ち、かつ危険なのが多数の自転車である。商店街を歩く人がまばらなためか、オリオン通り・ユニオン通りを走る自転車はスピードを緩めることなく走り抜けてしまう。そのため時折歩行者と接触しそうな事態になる場面も見受けられる。

このような状態では歩行者が安心して歩ける筈もなく、特に買い物客と学校帰りの学生が混在する夕方は、自転車との接触事故が危ぶまれる。せっかく「サイクルシティうつのみや」として、有名になりつつあるのだから、自転車のマナーを向上することに力を注ぐ必要がある。それと同時に、人々が歩く中心市街地に、自転車がスピードを出せない仕掛けを作り出すことも課題である。



(図-3) オリオン通りの中に無秩序におかれた自転車

4-5. 『宇都宮といえば?』という名物のイメージが薄い

餃子、カクテル、ジャズなど、宇都宮の名物とされているものは多いが、『宇都宮餃子』といえは全国的にも知名度があるものの、一方で『カクテルのまち』、『ジャズのまち』としての宇都宮の知名度はあまりなく、地元の人にすらあまり知られていない。これでは宇都宮を『●●のまちうつのみや』として宣伝することが出来ないため、全国的

な知名度を上げることが困難となってしまう。宇都宮のブランド戦略の強化が必要である。

【5. 施策事業の提案】

5-1. 『歩けば 愉快だ 宇都宮』を広める

『餃子のまち』『カクテルのまち』など宇都宮が見せる顔はたくさんあるが、それを含め、「歩いて楽しく見て回れるまち・うつのみや」として宇都宮中心市街地のイメージ作りをしていくことを提案する。買い物のため、餃子を食べるため、カクテル、ジャズなど宇都宮市街地を訪れる人の目的となるべき要素はたくさんあるが、それらを全てひっくるめていろいろなものを歩いて見て回れるまちとするために、人がまち歩きを楽しめるための様々な要素（具体例としては 5-2~5-4）をまちに取り入れるのだ。

また、宇都宮市には『住めば愉快だ宇都宮』というロゴマークがあるが、それをもじって『歩けば 愉快だ 宇都宮』というロゴマークを中心市街地各所に配置し、まち歩きが楽しいまちとしての宇都宮を周知させていきたい。



（図-4）『住めば愉快だ宇都宮』をもじったロゴマークのイメージ

5-2. まちなかに座って休める・食べられる場所の設置

宇都宮をまち歩きを楽しめるまちとするためには、歩きつかれたときに一息入れることができる休憩スペースが不可欠である。そのため、腰掛けるためのベンチなどをまちの各所に設置したい。また、釜川プロムナードの周辺に植え込みなどを充実させ、緑の中で心安らげるような休憩スペースも欲しい。

（図-5）熊本市のアーケード街に設けられたベンチ

写真のようなベンチであれば、向き合って座って話をすることもできるし、外側をむいて座って、まちを一人で眺めていることも可能である。

5-3. ゆっくり休める癒しの場所の創設

吉祥寺では、井の頭公園の存在が、まちにゆとりと癒しを与える大きな要素となっていた。宇都宮にも、規模ははるかに小さいが、井の頭公園と同様の効果をもたらす可能性のある施設がまちなかに存在している。二荒山神社と釜川、それに城址公園、オリオンスクウェアである。これらの施設を活用することにより、宇都宮のまちなかの魅力を増すことは可能である。

井の頭公園では、様々な大道芸が行われ、フリーマーケットなども開かれている。こうした活動が二荒山神社前の広場、城址公園、オリオンスクウェアなどで行われれば、まちに賑わいをもたらすことができる。釜川の水と緑や二荒山神社の緑は、まちなかに潤いをもたらす貴重な資源であり、癒しの空間を作り出すために活用することができる。

5-4 路地ごとにイメージを定着させ、名称付けをする

オリオン通りやユニオン通りから伸びる路地を活用し、広がりのある歩ける場所をつくっていききたい。そのために路地ごとに同じジャンルの店（飲食店、ゲームセンターなどのアミューズメント系）などを集め、名称をつけることでエリアごとのイメージの定着を図ることが考えられる。

例えば、飲食店を集めた『満腹横丁』、アミューズメント系の店を集めた『遊楽（ゆらく）通り』、コアな趣味を持つ人々が訪れる『オタク通り』など、そのエリアの特徴を分かりやすく、かつ訪れる人々の興味を引くような名称付けをしたい。

また、『餃子通り』『ジャズ通り』『カクテル通り』など、宇都宮名物を訪れる人々にアピールし、体感してもらうためのエリアも作り
たい。

5-5 新たに路地を作り出す

宇都宮は、吉祥寺などのような実際の路地は少ない。そこで、中心市街地に多数存在している駐車場の活用を考えたい。特に、時間貸しの駐車場などは、決まった時に屋

（図 - 6）駐車場を活用した屋台（2010 年 11 月餃子祭りにて）

台や簡易な店を出店することは可能である。そこを特徴のある路地的な空間として利用するのだ。現在の、宇都宮屋台横丁のような横丁があちこちにできることになる。餃子祭りの時などは駐車場に車を入れず、屋台などを置いて商売をしている店が見られるが、そのように普段から時間帯で分けながら屋台を出し、仮の路地のようなものを作ってしまうのだ。

5-6. 『おもてなしバッジ』の配布

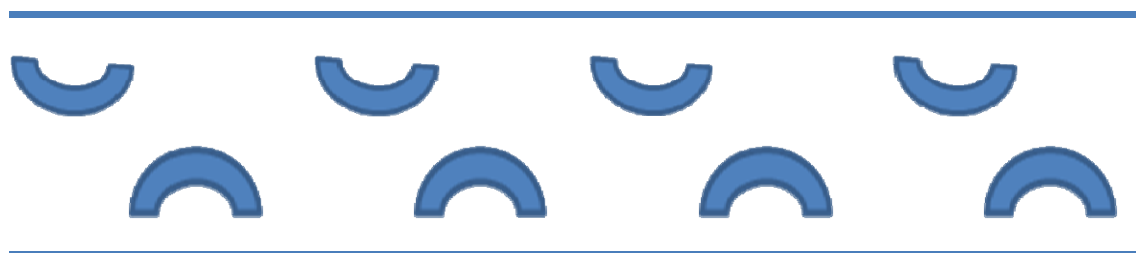
創意工夫が凝らされたまちでも、そこに住む人の印象が悪ければ良いまちとは言えない。そこで、訪れる人を気持ちよく迎える『おもてなし日本一のまち』を目指そうという意識をまち全体に浸透させるための呼びかけなどを行う必要がある。

また、宇都宮の人々が自分たちのまちがおもてなし日本一のまちを目指していることを忘れないよう『おもてなしバッジ』や『おもてなしワッペン』を作成、商店街を中心に配布し、商店街の店員さんが普段からつけてもらえるよう促す。まちの中でバッジやワッペンが目に入るようにしていくことによって、訪れる人を気持ちよく迎えようという意識が強まるものと考えられる。

5-7 自転車に対する障害物の設置

オリオン通り・ユニオン通りなどにおける自転車による危険性を少なくするために、商店街のところどころに障害物を設置し、自転車がスピードを出して走りにくい状況を作り出す。ところどころに障害物を設置して自転車の速度を緩めたり、自転車を降りて手で押さなければならないようにしたりするのだ。

図-4の熊本市の通りにおかれたベンチのようなものを、下の図のように適切に配置することにより、人々の街なかの休憩場所を提供するとともに、自転車の速度を落とすことにも寄与すると考えられる。



(図 - 7) ベンチの設置による自転車のスピードコントロール

この場合、自転車通行者の便を考えると、オリオン通りやユニオン通りにはほぼ平行に自転車専用道をつくることも併せて検討する必要がある。宇都宮は「サイクルシティ宇都宮」を一つのブランドにしていくことを考えているとしたら、自転車専用道路の整備も課題である。自転車専用道路が整備された場合は、オリオン通りでは自転車を押して

歩くことを義務付けることも可能と思われる。自転車の脅威から安全になることにより、商店街の歩きやすさは格段に上がる筈だ。

5-8 まとめ

以上の施策事業は、「歩いて愉快なまちづくり」を進めるために、吉祥寺周辺との比較の中で、提案としてまとめたものである。

「歩いて愉快」の中身を考えると、まち自体が明るく開放的なイメージを有していることを前提として、さらに、歩いていて

- (1) 安全・安心
- (2) 賑わいがあり・楽しい
- (3) いやし・安らぎがあり、休息できる

などの条件が必要であると思われる。

前提条件である明るく開放的なイメージを作り出すための施策事業としては、5-1の『歩けば 愉快だ 宇都宮』の標語を広めること、並びに、5-6の『おもてなしバッジ』の配布が該当する。これは、意識を変えるための施策でもある。

これらの施策事業を整理すると

条 件	施 策 事 業
前提条件 (意識を変える)	5-1 『歩けば愉快だ宇都宮』の標語を広める 5-6 『おもてなしバッジ』の配布
(1) 安全・安心	5-7 自転車に対する障害物の設置
(2) 賑わいがあり・ 楽しい	5-4 路地ごとのイメージを定着させる 5-5 新たに路地を作り出す
(3) いやし・安らぎ がある、休息できる	5-2 まちなかに座って休める・食べられる場所の設置 5-3 ゆっくり休める癒しの場所の創設

これらの条件を、今回提案している施策事業だけで達成できないことは当然であるが、今回は宇都宮のまちなかで特に必要とされる施策事業の提案を行った。

例えば、安全安心のためには、自転車による危険性の除去だけでなく、まちなかのバリアフリー化や防犯体制の整備等々の施策が必要なことは言うまでもない。また、まちなかに賑わいをもたらすためには、様々な店舗や飲食店があり、まちなかに居住する人を増やすことなどがより根本的な対策となる、しかしこれらは、既に取り組みがなされていたり、あるいは課題自体が非常に大きく、長期的に取り組んでいくべきものもある。

そこで、今回の提案では、『歩けば楽しい』という観点から、従来あまり指摘されていなかった路地や休憩場所の存在などに着目して、施策事業を提案した。

【6. おわりに】

宇都宮のまちなかは、吉祥寺などの歩いて楽しいまちと比べると、歩くことに対して十分に考慮されたまちとなっていない。しかし、逆にいえば、まちを歩いて愉快にする工夫の余地が非常に多くあるということもできる。宇都宮には餃子だけでなく、ジャズ、カクテル、サイクルシティなど、人を集めることができる要素（素材）がたくさん存在している。今回提案した施策事業を活用して、集まってきた人々を、まちなかで楽しく歩かせ、『歩けば 愉快だ 宇都宮』を実現していきたい。

【7. 参考文献】

「吉祥寺スタイル」2007年文芸春秋社